

# 患者の目



今でこそ混合型血管奇形という病氣のことを知ってもらったために自分から伝えられるようになったが、小学校の低学年ごろまではどんなふうに伝えていいかわからず、クラスの中でも消極的な方だった。

左右で太さの違う脚のこと  
とでいじめられて学校に行けない日もあったが、学年  
が上がるとつれて友達も増え、  
学校が楽しくなり、気が  
つけばいじめられること

はなくなっていた。体育の授業も中学に入り手術するまでは何でもやっていた。運動会の徒競走は毎回ビリで、その一瞬は恥ずかしかったけれど、当時の私はできることはみんなと一緒にやるのが重要だった。

小学3年の時、クラスメイト一人ひとりの良いところを書き、冊子にして本人に渡すという授業があった。私が受け取った冊子で同級生は病氣についてほとんど触れていなかった。私の印象が病氣が前提でないところ、中学1年の夏休み、左右で長さの差が大きくなった脚を手術するため2学期から入院し、病院に併設された養護学校に通学することが決まった。手術はいざししなければならぬと言われていたので納得できたが、いつも一緒にいた友達と離れ離れになるのが悲しくて、泣きながら帰ったのを覚えている。

## 友達に理解、自然体

通学途中に自宅のポストに近況報告の手紙を入れてくれたり、外泊許可が出て帰宅する度に遊びに来てくれたりして一番の心の支えとなった。

怖くて隠し続けた。ただ、交際した人には正直に伝えた。病氣のある私を好きになってくれたことで少し自信がついた。

10〜20代のころはちょっとしたことでも病氣がある自分に引け目を感じることもあれば、良かったと思えることもあり、よく気持ちが揺れていた。頻度は少なくなりましたが、今でもそれは変わらない。しかしこれまで周囲の理解があったから、私は今ありのままの自分を出せるようになったと思う。これが「病氣と付き合っていく」ということなのだろう。

医療